

枝野幸男（経産大臣）

「原発」国民投票について熱く語る！

枝野氏はBSフジの『プライムニュース』で
「民主主義の、本来の原則は直接民主主義…」と発言。
「原発」国民投票に懐疑的なキャスターの突っ込みも正面から受け止め、
更に重ねて直接民主制の意義を説いています。
枝野幸男が好きな人も嫌いな人も、これは必読です！

BSフジ『プライムニュース』（2012年5月10日20時～放送）

番組開始から57分のところで

反町キャスター：

枝野さん、その原発の是非をめぐってヨーロッパなどで国民投票やったりしたっていう国がありますよね。そういうものについてどういう風に一定の理解…国民投票っていうのは考えたことありますか？

枝野：

私、野党時代に、国会の憲法調査会、民主党の憲法調査会に一応やってみました。
その時に、憲法改正以外でも国民投票でものを決めるということを導入すべきだと、いうことを、の旗を振っていた一人です。ですから、一般論として国民投票のようなものがですね、重要な案件について有効な手段だし、活用すべきだと思っています。
ただ、そのためには議論がある程度煮詰まって成熟していることが前提になります。

反町キャスター：

じゃあどうなったら成熟なのか？っていうそこがわからないんだ。

枝野：

つまり国民の皆さんの間にですね、
その、ほぼ共有されるですね、情報が共有されているとかですね、
そういったこと
それから
国民投票する以上は

選択肢がせいぜい3つくらい
本来は2つぐらいに
絞られないといけないわけですけども
じゃあたとえば原子力発電どうするのかという話も
もちろんただちに全部止めろという人と
これまで通り原発はどんどん原発は使おうっていう人
この人たちは分かりやすいわけですが
恐らく多数の人たちはこの間にいて
安全が確認されたものは
しばらく使うけれどもいずれはなくしてほしい
でも、そのいずれも5年後なのか20年後なのか30年後なのか
意見も分かれてるでしょうし
その判断するための材料ほしいですよ。
って思ってる方もたくさんいらっしゃるんだと思います。

八木キャスター：

でもその情報の共有とそれからその判断の選択肢の絞り込み
っていうのは政府の方で提示することになりますよね。
ある程度しないとっていうことかというと
どのくらいのスケジュール感というか
どれくらいの時間がかかるのか

枝野：

まさに今、総合資源エネルギー調査会をはじめとしてですね。
まずは国民投票は別としても
国民の皆さんでご議論いただくための
いくつかの選択肢
というものを示ししなければならないだろう
ということで
その選択肢の案を作るご議論をいただいている。
これもなかなか
色んなお立場いろんなご意見の方がいらっしゃって
やはりその30人くらいのメンバーでやっていただいているんですが
30人30様くらいのご意見があるのをですね
国民の皆さんにわかりやすい選択肢を示すためにということで
いろいろと意見を集約してきていただいて

今5とか6とか7くらい
とっていいんでしょうかね。
それをさらにご議論いただいて
最終的には政治の方で責任を持って
これくらいの選択肢があるんですが国民の皆さん
どうでしょうかということの選択肢をできるだけ早くお出ししたい。

八木キャスター：

でもそしたらそれは、国民投票以外のどういう議論の場で誰がどういう風に国民が議論をするのでしょうか？

枝野：

これはですねその、間接民主主義のまさに本質論、一般論なんですけれども
まさにこういったメディアとかですね、いろんなところでいろんな皆さんが
例えばいくつか選択肢が示されればですね、
色んなご意見が主張されるでしょうし、
国民の皆さんの間でもいろんな議論が起こるでしょうし、
例えばそれぞれの地域ですね
政治家議員のところに対してもいろんな
是非この案で行ってほしい
呼びかけ働きかけあるでしょうし

八木キャスター：

既にいろいろありませんか？出てるんじゃないでしょうか？

枝野：

今まさに、100人100様みたいなご意見なわけですよ。
それをある程度絞り込んだ中で
こういう選択肢なんですけど、どうでしょうかと
というようなご議論をいただいて
最終的には100人100様の意見を一つにしないといけないわけですから
それは最終的には政府の責任でやっていく。

反町キャスター

枝野さんね。福島原発事故を受けて原発是非の国民投票を
ヨーロッパでやって、あのような結果が出た。

日本でも、例えば、今年とか去年とかで、そんな国民投票をやったら非常に感情的な議論が席卷して、原発ノーという結果があまりに強く圧倒的に出てくる可能性がある時期ありましたよね。

そういう状況を想定した時に、エネルギー行政を司る経産省としてそれはとても正面から支えきれない、そういう危惧は感じましたでしょうか？

枝野：

私はありません。

反町キャスター：

ない？

枝野：

私はそこは民主主義の、本来の原則は直接民主主義だと思ってますから、まさに自分で、国民投票法、旗振ってきましたから…

ただしそれは、

感情とか言ったそういう問題じゃなくて、国民の皆さんの議論と情報が一定程度共有され、

議論が煮詰まっているかどうかということが問われるわけであって、

感情的に一方づくのではないかという話ではない

まさに民主主義を否定するお話になると思いますから

今のお話は、一時的な感情でというお話だとすれば、

そこをそうですと言ってしまったら、

私自身も民主的なプロセスで国会議員に選んでいただき、

大臣をやっているわけですから、

自分を否定することになります。

反町キャスター：

でも代議制というのは、より専門性が問われる中で、

国民に替わって、専門的な知識とか、

専門的な判断を下すのが、代議制のシステムでもありますよね、

枝野：

だけど私は、民主主義の本来の基本は、直接民主主義だと思っています。

ただし、例えば1億数千万の日本で直接民主主義はとれませんから、

代議制をとっているんだと、

やむを得ずそういう現実的な対応をとっているのだと思っていますので、
直接民主主義そのものを否定をするつもりはありません。

ただし、直接民主制であれ、間接民主制であれ、国民の皆さんが、一定程度の情報の共有と、議論の一定の成熟度が必要だと、いうことです。

八木キャスター：

成熟したっていうのは最終的に政府が煮詰まったと判断するとして、
その前の選択肢とかをある程度出すっていうのは、いつくらいとみてるんですか？

枝野：

選択肢は、本当はもうそろそろ出しておきたかったんですが、やっぱり
色んな多様なご議論が出ている中で、来月の早い段階くらいにはお示しをしたいなと思っ
ています。

反町キャスター：

それをどういう示し方になるんですか？エネルギー基本計画の話じゃないですよ？

枝野：

その前提として エネルギーの環境…
将来の日本のエネルギーのあり方はどういう構造がいいのか
ということで、いくつかの選択肢を国民の皆様にお示しをすることになると思います。

3人目のキャスター：

今大臣が熱っぽく何度もおっしゃっていた民主主義の話ですが、
概念的に「原発どうするか、再稼働か」って5つの要素をどういう解を出すかというこ
とで、大臣も先ほど、感情と仰いましたけど、

安全性っていうのは、科学的データに基づいた、根拠もきちっと議論しなくちゃいけない。
よく安心と安全は違うって言いますよね。

国民的にも周辺の方も安心することができるか。

もう一つは、日々、冬だ夏だっていう現実にも対応しなくちゃならない。

化石燃料輸入ばかりしていて、どんどん国富が出ていったらどうなるのか。

中長期の国のエネルギー政策の目指すものは何なのか。

それぞれに全部意見があって、

この五次方程式だか、五元方程式だか、これの解を見つけるっていうのは、

やっぱり直接民主主義であるべきなんですかね。

非常に難しいと思うんですけど、

例えば、解散総選挙で民意を問うとか。

枝野：

ですから、私は今、直接民主主義でやる方がいいことだとは全く思っていない。
まさに議論が、国民がじゃないですよ、議論が成熟して、国民の皆さんが、
ある程度の情報共有が、できてる状況であれば、私は直接民主主義という手法をとっても、
そのことに問題があるとは思わない。
ただ今の状況では、まさに情報の共有であれ、議論の成熟であれ、
それには相当な時間がかかります。
そうしたことの中では間接民主主義というプロセスの中で政府が、
責任を持って選択肢を示し、
国民の皆さんの意識がどの辺にあるかということ、責任を持って判断するしかない。
とは思っています。
ただし直接民主主義そのものを否定する議論は、私にはできない。

反町キャスター：

今はしょうがないので、暫定的にそうしている。
代議制でやっている、それでいいんですよ。
安心、感情というのが、政治家としては、非常に重要なファクター
特に選挙が近かったり、大きな政局のうねりの中で、原子力の問題が、一つの 이슈に
なってるじゃないですか。
だから、そういう意味において、原子力発電所の再稼働という問題が、冷静な経済合理性、
安全性、そういうものにおいてのみ議論されているのか、そこに新たな、それを政治的に
利用して、何か次の選挙に向けてのステップにするとしたならば、議論が大きく燃れてい
くんじゃないかっていうそういう懸念が僕にはあるんですが、
今、原発、再稼働を巡る議論が、きちんと、冷静に経済性と安全性にだけ、立脚して、行
われてるとお感じになってます？これが政治の道具になっているんじゃないかという実感
はないですか？

枝野：

それは私が評価する話ではない。

反町キャスター：

当事者として、本来はこういうべきのところを
相手がこう出てるからこうは言えない。
という政治的な駆け引きのツールになっていませんか？原発が。

枝野：

そこはですね。政治的な駆け引きじゃなくて、政治の責任のもう一つの要素は国民の皆さんに、私はこうしたい、私はこうあるべきだと思う、ヴィジョン、プランを立派なものを持つということと、それをどう国民に説明して、説得して、多数派を形成するか、理解をいただくか、その両面だと思っていますので、どういう説明の仕方をどういうプロセスですれば理解を得られるか、ということは、これは政治家は当然考えます。そのことは私も考えています。

反町キャスター：

番組にくるメールは心配をする人がお便りを多く寄せるせいかもしれないけれど、なんで再稼働なんだ。心配だろう、本当に安全なのか。こういうりがくると、そうするとやっぱり、ポピュリストとは言わないけれど、そういう人達の中には、やっぱり、危険なんだということを言った時に、これはある程度の安全というものを確保したうえで、あとは、リスクはあると認めたとうえで、必要だからやるんだというのが、正直な発言だと思いますよ。それを言いづらい環境になっている。

枝野：

私は言ってますよね。

私自身はこれも公言してますけど、3.11 以前もそうでしたし、3.11 以降は特にそうですけども、原子力発電に関しては、一貫して懐疑的です。

懐疑的な立場ですが、安全性について、絶対はありません。

絶対はありませんが、一定の安全性は確保しました。

リスクは0とは言いませんけど、安全性を確保したうえで、再稼働の必要性があると、皆さんに訴えています。

今お尋ねになっているのは政治一般論ではなく、政治家の資質だと思います。

つまり選挙の損得で、政治家として、責任を持って言うべきことを言っていない政治家がいれば、それは民主主義のプロセスで、国民の皆様が淘汰をされることだと思います。

反町キャスター：

ある程度選択肢を示して、みんなの議論が熟してから、どういう方向性にするか、政府で決めるというお話…

枝野：

国民投票で決めるのだとすれば、その例えばドイツで言えば、20 年くらい、原発をやるのかやめるのかということ、国民的な議論を積み重ねてきているわけですよね。その国と

同じようなことをね、日本で今できるかと言えば、率直に申し上げて、3.11 以前は、特別原発を進めようという人と、一部原発を真剣に考えていた人以外は、残念ながら、ほとんど原子力のリスクと、ベネフィットについてあまり考えてこなかった。現実があるわけですから、そこから議論が始まってるわけですから、国民投票で決着をつけようとするのであれば、それには相当時間がかかりますね。

八木キャスター：

ただ選択肢は、来月…

枝野：

それは、国民の皆さま 100 人 100 様の議論がありますから、政府としては、こういう選択肢のどれかで、この国のこれからのエネルギー政策を基本を作っていこうと思っていますが、皆さんどうでしょうか？ということ、少し絞り込んだ形で、お示しをし、それに対する、国民の皆さんの、広い意味での反応を踏まえたうえで最終決断をしますということ。

八木キャスター：

じゃあその後の最終決断ということは大飯に関しても、再稼働についてはその後ということになりますか？

枝野：

いや、これは中長期のエネルギー政策について、どうするかという、この話は短期的に…短期的にも、もちろん安全性は確保しなければなりません。安全性を確保されたものについて、短期的にどう利用するかという話と、私たちは、政府の大きな方針として、原発依存からの脱却というのは決めています、ということは、今、依存しているんです、今依存しているということは、脱却するのに、何年かかりますよね、という話なんです、依存しているから、安全確保したうえで、当面使わせて下さい、むしろ、原発依存脱却という方針を示している、当然の前提なんです、で、その依存からの脱却について、じゃあ何年かけて脱却するのか、もちろん今すぐ脱却しろと、相当無理があっても脱却しろという人もいらっしゃるけれども、もちろん国民の中には従来通り、原発を使い続けようという人もいらっしゃるけれども、政府としては、依存から脱却していきたい。10年なのか20年なのか30年なのか40年なのか、

反町キャスター：

その中長期的な話と大飯の話は別？

枝野：

全く別次元です。

終わり

1 : 11 : 12